

明治期盲人教育における宣教、宣教師と音楽

手代木俊一

筆者は平成一二(二〇〇〇)年三月、国際基督教大学キリスト教と文化研究所発行『人文科学研究(キリスト教と文化)——国際基督教大学学報IV—B』第三二号に「明治期盲人教育におけるキリスト教と音楽」を発表した。その後関連資料の収集に加え、書き改めた箇所が多数生じてきた。今回の「明治期盲人教育における宣教、宣教師と音楽」は「明治期盲人教育におけるキリスト教と音楽」の大幅な改訂増補版にあたるものである。前回は「キリスト教と音楽」に就いてあらわしたが、今回はそれに加え「宣教」、及び「宣教師」という観点から論をすすみたい。

さて、神の摂理の普遍性を信じ、伝える者が一九世紀という時代に海外宣教を展開していった。我が国にはプロテスタント教会の宣教師が主にアメリカから来日した。吉田亮氏は宣教、及び宣教師について次の様に述べている。

ひとつの宗教的背景をもって、異文化の中へその背景の根源を全く移植しようとする宣教師は文化間接触の最前線で活動する文化的エージェントである。彼等は派遣団体とその向こうの多数の賛助者からの支援と期待に応えるため、かつ自らの動力となっている福音の伝播のためにあるゆることを行った。それらは多くの場合、受容されやすい事業と共に提供される。教育、出版、医療、看護、福祉、音楽、体育、芸術などがそれである。被伝播者の許容するところを推し量りながら活動のスタイルを作っていく^①、

盲人教育は教育、出版(点字の聖書、讚美歌)、医療(眼科)、看護、福祉、音楽に関わる重要な宣教事業であるとともに、弱者、病者へ

の伝道はキリスト教精神そのものである。またそれは同時に明治政府も推し進めようとしていた事業でもあった。音楽（平曲、箏曲、三弦等伝統芸能）は歴史的にも盲人の有力な生計の手段であった。

さて聖書には盲人に関する記述、譬えが随所に書かれている。石松量蔵氏はその著『盲人とキリスト教の歩み』の序説で次のように述べている。

「その時、目しいの目は開かれ、耳しいの耳はあけられる。その時、足なえは、しかのように飛び走り、おしの舌は喜び歌う。それは荒野に水がわきいで、さばくに川が流れるからである」

（イザヤ書三五ノ五、六）

「盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされていゝる」（マタイ伝一一ノ五、六）

この聖句はメシア来臨の預言と、これにたいする、イエスのメシア（救主）たることの宣言である。

キリスト教の伝道が行はれるところ、必ず盲人や身体障害者が、福祉をうけ、喜びの生涯に入りつつあることは、歴史の事実である。

わが国においても、キリスト教が伝えられるや、盲人達がその福音と福祉と与り、したがって霊眼も開け、人生の意義をも

悟つて、意義ある生活に入りつつあるのであつて、キリスト教と盲人の救いとは、必然的につながつていくことがうかがはれるのである。

明治期、日本におけるプロテスタントの宣教はアメリカから来日した宣教師が中心だったと冒頭で触れたが、一九世紀のアメリカ都市部では工業化と商業化がすすみ、工業生産の増大、楽器の製造の増加は楽器の中流家庭への普及を生んだ。そしてこの中流家庭の人達は『ミッシュォナリー・ヘラルド』、『スピリッツ・オブ・ミッシュォン』等の海外宣教の雑誌を購読し、海外宣教のための献金をしていた。楽器の大量生産は市場を海外に求めていった。後述する明治一三（一八八〇）年アメリカから来日した音楽教育のお雇い外国人メーソンンの日本派遣に関して『ポストン・ヘラルド・サップルメント』の記者は「メーソンン氏の仕事によつてそのような楽器『ピアノ・オルガン』の需要が起これば日本という国は楽器の最大の海外市場になるだろう」と述べている。この時代は海外宣教と音楽産業が結びついていた。海外宣教の情熱はこの中で起こっていたのである。

宣教事業を実際に行うのは宣教師が主であるが、それを資金的に支える人、また、平信徒で海外には行かず、国内で海外宣教事業の一翼を担う人も多数存在した。海外宣教を思い描き、メーソンンを日

本に派遣したアメリカのトゥルジャーがそれにあたる人物である。タイトルを「明治期盲人教育における宣教、宣教師と音楽」で「宣教、宣教師」としたのは宣教師と信徒が一体となって宣教事業が行われたことをあらわしたからである。

また一九世紀アメリカの海外宣教を特徴づける考えに「音楽による宣教」があげられる。『ドワイト・ジャーナル・オブ・ミュージック』一八八〇年八月一四日の「日本における音楽」という記事では、日本では単なる音楽のお雇い外国人であるメーソンを音楽に満ちた宣教師 (tuneful missionary) と呼び、彼の信仰と初心をつらぬく勇氣に賛辞を送り、そして「我々は彼の信仰が報われることに疑念を抱いてはいない。なぜならば、音楽とは神の力によって魂に植えられた最も重要なものである。アメリカは神の御業を日本人に実現させるための最適な人材を、その鍵穴に合う鍵とともに送りだしたのである⁵⁾」と結び、メーソンが日本宣教の適任者であることと、宣教における音楽の力の揺るぎない確信を表現している。そしてキリスト教と音楽は盲人教育とも強く結びついていた。

これら一九世紀の海外伝道の特徴である「音楽と宣教」という観点も含めて「明治期盲人教育における宣教、宣教師と音楽」を以下展開して行きたい。

明治期、日本におけるプロテスタントの宣教はアメリカから来日した宣教師が中心ではあったが、盲人への伝道ではアメリカ人以外

の宣教師の活動も顕著であった。

明治期の盲人教育は明治九(一八七六)年スコットランド一致長老教会宣教師フォールズ、アメリカのドイツ・ルーテル教会宣教師(ドイツ生まれ)ボルシャルト、中村正直、津田仙、岸田吟香、古川正雄らクリスチャンによる楽善会によって計画され、後に大内青巖ら仏教徒も加わって設立した東京築地の楽善会訓盲院がその嚆矢であった。

フォールズは築地病院で眼科の治療をする一方で日本に盲人が多いことに気付き、盲学校の設立を提唱する。当時の日本の状況は「日本に盲人多き埃及の二倍し英國に三倍し、歐米諸國には未だ曾て見えざる所なり。是は目眇より傳染する一種の眼病あるに依れり⁶⁾」そして「此の如き多數の盲人は之を訓ゆるにバイブルを以てするより善きはなし、而してバイブルを授くるや、先ず之を日本語に翻譯するを以て急務とす、然れば速かに日本の有志者共謀協力して一の訓盲所を設立し、日本譯の聖書を凸字で製し、大に盲人の為に利益を起こすべし⁷⁾」と彼は提唱する。

アメリカのドイツ・ルーテル教会宣教師(ドイツ生まれ)ボルシャルトは中村正直が開いた同人社で教師をしていた。

明治八(一八七五)年五月二二日、六人はフォールズ邸に集まり盲人教育について語り、この教育を推進する楽善会を組織した。会頭には古川正雄、書記に岸田吟香を選び、ヘボン訳ヨハネによる福

音書第九章のローマ字版とカタカナ版をそれぞれ一〇〇部、凸字版にすることを米國聖書会社に依頼した。そして明治九(一八七六)年には訓盲院設立に対し、宮内庁より三〇〇〇円が下賜された。⁸⁾

ヨハネによる福音書第九章のイエスの言葉は、視覚障害を前世の因縁によるとされて差別、抑圧されてきた盲人に対する福音となっている。現在でも障害があれば前世の因縁と言われる場合がまだまだ存在する。まして当時はこのようなことが根強い俗信として広まっていたであろうことは想像にかたくない。このヨハネによる福音書第九章が盲人への宣教として最初に翻訳されたことは大変意義深いことだと思われる。このヨハネによる福音書第九章は楽善会によって日本で最初に作成された盲人教育のための書で、現在も筑波大学附属盲学校に保存されている。⁹⁾しかし、このヨハネによる福音書第九章に関して、楽善会ではなく最初に作成したのは宣教師ゴープルであるという説を唱える研究者も存在する。C・パーカー氏は *Jonathan Goble of Japan* で次のように述べている。

日本人の中において盲目となる主な原因は「眼炎とはしか」であった。R・オールコックは、床屋で普通に提供されているサービスである、臉をひっくり返してその上を「こすりあげて、ひっかき、銅製のヘラで磨きあげる」というかわった風習がその原因の一つであろうという考えを述べている。その原因がな

んであれ、乞食をすることなく、鍼治揉療治、金子貸出、音曲指南などという「見苦しくない」方法で生計をたてている盲人が多数存在する。

オールコックがかつて見捨てられた文盲の人々にローマ字で印刷された聖書を読むことを教えたように、ゴープルは今、彼の創案による版木によって印刷された聖句の読み方を、盲目の人に教えたのである。その小冊子は、アルファベットと触覚にすばやく訴えるために目立つよう、盛り上がった文字による聖書の聖句八頁で構成されている。「一八歳の青年が」とゴープルは書いている。「三歳の頃よりまったくの盲目であるが、彼はほとんど何の指示も受けずに、私が初版の入門部分を渡してから二週間程でその本のすべてを理解したのである」。予想していた通り、ゴープルはその小冊子を参考資料にしながら手紙で訴えている。「全世界の兄弟姉妹の人たち、そして慈善家の皆様」、資金調達を請け負った人に彼は言う、「どうぞ援助の手をお差し伸べ下さい。そうすれば、我々は二重に見えなくなっている者たちからの光の要請に応えることができるかもしれないのです」。ゴープルはより多くの書籍を盲目の人たちに対し印刷するため、その「印刷機と器具」に必要な資金を求めている。彼が応答として受け取った全額はわかっていない。ネーサン・ブラウンが指摘しているように、ゴープルはイギリスのバ

ブテストから寄贈されたアルビオン印刷機を「その印刷機で聖句の一つも印刷していなかったので、結構よい値段で」売っている。だが彼は再び厚かましくも印刷機を求めてきている。いかに彼の動機がガツガツと貪欲なものであったとしても、他の人々の中でゴープルは見捨てられていたマイノリティーへの気づかいを喚起しようとしたのである。その年の年末に向けて盲人たちに読むことを教えるという一大目的のために、東京である協会が形成された。そして明治天皇は「彼等が創設した団体に慈悲深くも三〇〇〇円を下賜された」のである。

…中略…

彼は東京府への嘆願書の中で「盲人教育のために設立しようとしている学校の地所と書籍を購入するため、税収の一部を都合して下さるようお願いいたします」と述べている。「原注 東京日日新聞 明治一〇（一八七七）年一月七日、読売新聞 明治一〇（一八七七）年一月七日をも見よ。ゴープルの嘆願書の日付は明治一〇（一八七七）年一月七日」

それに対して東京府の広報官は、要請されたような形での税収の割り当てを決定する規則がなく、また、日本人の人力車発明者の申請者がいるためゴープルを人力車の発明者として認定できないとその立場を説明した。東京府は中央政府にその嘆願書を付託しただけで、それ以上のことは行わなかった。ゴープ

ルはまったく資金を集めることができず、盲人のための学校は建設されなかった。¹⁰⁾

またこの件に関して川島二郎氏はその著『ジョンナサン・ゴープル訳「摩太福音書」の研究』で次の様に述べている。

こうした不遇な時代に、彼は罰せられたように病氣勝ちになり、眼を患らって半年近く視力を失う状態に見舞われた。彼はこのような不幸を、深い信仰的内省によって、次の活動へ繋げていった。一八七六（明治九）年に『ジャパン・ウィクリー・メール』紙は、彼がローマ字の点字試作本『ヨハネ福音書』九章を作ったことを報じている。この関係の報道はその後も継続されて、点字による盲人教育を目的とする組織が日本人たちによって作られ、年末に皇室からの恩賜金を下されたと伝えていく。彼はこの組織と関係が続けていたらしく、翌々年に自分の発明した人力車への課税の一部を訓盲院設立のために廻すよう、東京府に訴え出ている。「原注 Brown to Murdock, Mar. 18. 25. July 15. Dec. 23. 1876. 東京日日新聞 明治一一（一八七八）年一月七日」

これはなお究明を要する課題であるが、西洋の点字を日本に導入し訓盲院の事業の端緒を作ったのは恐らくゴープルだった

と見てよいのではなからうか。⁽¹⁴⁾

川島氏の発言にもあるように、ヨハネによる福音書第九章は衆善会、ゴープルのどちらが作成したのかについては今後の研究を俟たなければならぬ。しかし、アメリカ人宣教師ゴープルが日本語の聖書、讚美歌ばかりでなく、日本人への盲人教育の嚆矢ともなったのであれば、彼は宣教事業に欠かせない聖書、讚美歌の翻訳、そして社会事業・慈善事業にも大きな役割を果たした最初の宣教師であったと言えよう。

訓盲院は明治一五（一八八二）年には啞生徒も加え、盲啞教育双方の先駆となった。その後会友は官吏、僧侶が増えフォールズの影響力は低下し、キリスト教精神も失われたので彼は脱退していった。⁽¹⁵⁾しかし、フォールズの築地病院内には盲人用図書印刷のための活字、印刷機があり、盲人用図書室も設置されていたという。⁽¹⁶⁾

これらの宣教師の盲人に対する伝道は盲人伝道者を生んだ。明治生まれの盲人伝道者は藤田匡（明治二〇年伝道師試験合格）を始めとして一人に及ぶ。⁽¹⁷⁾

その後各地に盲啞学校が設立されたが宣教師、クリスチャンによるものが少なくない。宣教師によって創設された学校は四校（横浜訓盲院、函館訓盲院、岐阜聖公会訓盲院、同愛訓盲院）、ミッションスクールに準ずる学校は四校、クリスチャンによって創設された学校

は八校である。⁽¹⁸⁾この他にも明治期の社会事業・慈善事業にキリスト教（プロテスタントが主流）が大きく影響を及ぼすが、実際の施設数は仏教徒のそれが圧倒的に多かった。⁽¹⁹⁾

一方明治政府も同時期、文部省から「盲者教育論」「教育雑誌」第二一号（明治九「一八七六」年一月）を刊行。これはアメリカ教育局年報からの抄訳で、視力障害者への音楽教育の効用を述べたものだが、中村理平氏の見解「文部省発行の機関誌に掲載された各論は、わが国においても将来の実施を想定した命題である場合が多く」⁽²⁰⁾にもあるように明治政府は盲人教育への取り組みを見せはじめていた。「盲者教育論」は欧州の視力障害者の歴史に触れ、北米諸州の視力障害者の盲学校では唱歌・音楽の初歩、及び手芸を授け、障害者の生計の基礎とされていることについて次のように述べている。

館中ニ於テ手藝ヲ學ヒ得シモノ八九ハ手藝ヲ以テ活計ノ基礎トスルモノナシ大抵音楽ノ各科ヲ學ヒ人ニ授クルニ唱歌及音楽ヲ以テシ又『ピアノ』樂器ヲ教ヘ或樂器ヲ販賣シテ其生計ヲ營メリ今爰ニ音楽ヲ以テ盲者ノ活計ヲナセシモノ幾多ナルヤヲ揭示スルハ喜フヘキトナリ何トナレハ音楽ハ盲者ニ於テ大ニ樂ム所ニシテ視樂ノ闕乏ヲ補フヲ以テナリ⁽²¹⁾

また、後述する伊沢修二の上司にあたる留学生監督の目賀田種太

郎は『教育雑誌』（第八九号、明治二年「一八七九」二月）に「米國ペルキンス盲院狀況報告」を執筆し、その概要が『東京盲学校六十年史』で紹介されている。この中で「教科について、本院教科の趣意は二あり、第一は生徒の心思を發達せしめ、第二には彼等をして他人の扶助を仰がざらしめんが為切實なる職業を分ちて、文學科音楽科 音律科 職業科 の四科とす」と述べ、アメリカの盲人教育においては、音楽科、音律科を職業教育ととらえていることを報告している。¹⁹ 目賀田種太郎はフルベッキ等来日宣教師と深い関係を持っている。このペルキンス盲学校に関しては後半で触れる。

前述の樂善會訓盲院は後の明治一八（一八八五）年官立の東京盲啞学校になった。明治八（一八七五）年、創設当時の訓盲會社条例に「一、音楽及ビ唱歌ヲ教ユ」、また明治九（一八七六）年の樂善會規則（訓盲院設立ノ目的 第二條）には「和洋ノ樂器ヲ以テ音楽唱歌ヲ教ユ」と書かれていた。明治一九（一八八六）年にこの条文が現実化され、東京盲啞学校ではフランスス・ハーレルによって風琴、唱歌の学習が開始された。彼女の夫のフランス・ハーレルはアメリカ聖公會宣教師だった。さらに二〇年からは、白井規矩郎にピアノ、二一年には多久随にヴァイオリン教授の囑託が行われ、音楽と盲人教育が結びついていった。²¹

これ以前の明治政府の盲人教育への動きとして岩倉使節団の報告『米歐回覽実記』があげられる。ここでは盲人教育と音楽が結びつ

き、職業訓練となつてゐる様子が報告されている。

明治四（一八七二）年二月二〇日、アメリカ、オークランドの盲啞院訪問の際に「盲啞院ハ、全州政府ノ公校ニテ、…中略…盲生ニ授クル工芸少シ、多クハ樂工トナス、」と述べている。²²

また、明治五（一八七二）年一月二五日、パリの盲院を訪れ「午後二時ヨリ、盲院ニ至ル、…中略…抑育盲ノ趣意ハ、…中略…第二ニ其生業ヲ授クルニ至リテハ、目ニ盲スルモノハ、耳ニ聴ヲマシ、指ニ慧ヲマスヲ以テ、音楽ヲ教ヘ、婦人ニハ唱歌ヲ兼教シ、説教ノ伶人ヲツトメシムルヲ以テ主トス、」²³「盲女ハ一百余人アリ、女教師アリテ之ヲ授業ス、授クル所ノ業ハ、読書、算筆ノ外ハ、歌謡ヲ首トス、」²⁴「殊ニ盲女ハ姪欲ナキユヘ、説教ノ樂師ニハ恰好ナリト云、」²⁵「此日樂堂ニ於テ、盲男ニ樂ヲ調シ、盲女ニ歌ヲ諷シテ、數闋ヲ奏セリ、玲瓏縹緲トシテ、他ノ樂ヨリ、殊ニ清穆聞ヘキヲ覺ヘヌ、盲人ノ音楽ニ聰慧ナルハ、実ニ天ヨリ此職業ヲ命セシモノ、如シト、西洋ニテモ称美スルトナリ、周公ノ制ニ、樂官ヲ警師ニ託ス、真ニユヘアルナリ」と報告している。²⁶

これ以前京都では、明治一一（一八七八）年古川太四郎が知事宛に『盲啞生募集御願』を提出。同年「仮盲啞院」が開業し、明治一二（一八七九）年にはこれが正式に府立学校（古川太四郎監事「院長」）となった。この京都府立盲啞院（後の府立盲学校）が日本で最初の公立の盲学校である。この京都府立盲啞院の第二代の院長鳥居

嘉三郎はクリスチャンで、『京都府盲聾教育百年史』には次のように述べられている。「困難な状況におかれた盲啞院を支えた人々の中に良心的なプロテスタントの一群があったことを記しておかねばならない」⁽²⁷⁾。

これ以後の宣教師と盲人教育に関して明治二四（一八九一）年に横浜訓盲院、明治二八（一八九五）年に函館訓盲院を設立した宣教師ドレーパー女史と、明治二七（一八九四）年イギリス教会宣教会（CMS）宣教師A・F・チャペルの岐阜聖公会訓盲院設立が特筆される。また宣教師の設立ではないが、美普教会牧師大喜見源一郎が明治三七（一九〇四）年に浅草ではじめた同愛訓盲院が存在する。同愛訓盲院はアメリカ人信徒の寄金により設立されたものである。以上の四校はミッションスクールとして数えられるが、函館（昭和二四年）、岐阜（昭和一五年）は公立に移管され、同愛訓盲院は戦中に廃校になった。横浜訓盲院だけがキリスト教教育を現在も続けている⁽²⁸⁾。以下、横浜訓盲院、函館訓盲院、岐阜聖公会訓盲院について簡単に触れる。

C・P・ドレーパー女史は明治二二（一八八九）年横浜居留地に息子夫婦と住んでいて、按摩の笛を耳にし、その盲女子から日本の盲人の実情を聞いたことが横浜訓盲院開設の契機になったという⁽²⁹⁾。

彼女は横浜訓盲院での教育で聖書を教える必要を感じ、日本点字が発表されたこともあって、凸字ではなく点字のヨハネによる福音書

を横浜の米国聖書会社に依頼した。これが日本最初の点字出版物である。その後、マタイ、マルコ、ルカ、使徒言行録が出版され、大正四（一九一五）年には新約聖書の一一冊が完成した⁽³⁰⁾。

横浜訓盲院は明治三三（一九〇〇）年、横浜基督教訓盲院の名で私立学校認可。大正中期経営危機に直面したが今村幾太が再建、家庭的教育環境を形成した。昭和二六（一九五一）年、学校法人横浜訓盲院が設立されキリスト教主義に基づいた学校として現在に及んでいる。盲人野球も考案され、川口章吾は昭和一〇（一九三五）年、訓盲院ハーモニカ・バンドを結成、戦後は器楽合奏団を編成した。川口章吾は「音楽は文字や言葉にまさる偉大な力を持っている」と述べている⁽³¹⁾。

C・P・ドレーパー女史は後に明治二五（一八九二）年、函館に転任し、横浜訓盲院の経験から明治二八（一八九五）年、函館訓盲院を創設した。明治三一年第一回卒業の篠崎清次が鍼按の技術を教えるとともに函館訓盲院ではキリスト教教育を行った。篠崎清次もクリスチャンであった⁽³²⁾。

A・F・チャペルは明治二一（一八八八）年に岐阜聖公会宣教師として赴任、同教会の伝道師森卷耳ともに、明治二七（一八九四）年岐阜聖公会訓盲院を設立した。明治三八（一九〇五）年に岐阜訓盲院（私立）と改め、大正時代には点字聖書を刊行。点字聖書の刊行に成功により、訓盲院讚美歌集、日本聖公会祈禱書、日本聖公会

古今聖歌集、日曜学校讚美歌集等次々と出版していった。音楽教育も進められており、三部合唱、四部合唱が教えられ、クリスマスが近付くと練習が一、二ヶ月前から始められた⁽³³⁾。また大正一四（一九二五）年には西洋音楽の向上をはかるためシカゴからピアノを購入、スマイル夫人達により披露演奏会を開催した⁽³⁴⁾。

岐阜聖公会訓盲院に関して、A・ハミッシン・アイオン氏は「十字架の使節 カナダ宣教師が日本に与えた影響」の中で次のように述べている。

また岐阜のカナダ聖公会盲学校（訓盲院）は重要な、しかし等閑視されていた領域に、キリスト教の事業が行われたことを例証している。それは社会事業の必要な領域で、日本政府が一層努力すべき道を示した。この学校は、一八九一年の濃尾大地震のあとにつくられた男子盲人クラブに起源をもつ。当時日本には、盲人のための学校は他に一つあっただけであった。一九二〇年代末、訓盲院がカナダ聖公会の手から日本政府の管理に移されるまで、カナダ聖公会の宣教師は社会的に高い価値をもつ奉仕をした。日本における宣教活動の主要な貢献の一つは、例えば盲学校や幼稚園のような領域においてであった……中略……このような努力は社会事業の開拓を進めた力であり、施設の規模は小さかったが影響は大きかった⁽³⁵⁾。

さてここまで、イギリス（スコットランド）、カナダ宣教師の盲人に対する宣教事業を述べ、アメリカ人宣教師のドレーパーとゴールについて簡単に触れてきたが、ここでアメリカによる宣教と音楽と盲人教育の関係を京都府立盲学校を訪問した人達の関係から明らかにしていきたい。

筆者は平成一〇（一九九八）年九月二一日京都府立盲学校にうかがった。そこで私は明治一四年一月三日のルーサー・ホワイティング・メーソン訪問の記録を確認⁽³⁶⁾。また電話の発明で知られるグラハム・ベルや、アン・サリバンとの関係で知られるヘレン・ケラーの同校訪問の記録・写真を閲覧した。また、同校には明治一六年に伊沢修二がアメリカから持ち帰ったと伝えられるリードオルガンも所蔵されている⁽³⁷⁾。メーソンとベルはどうして京都府立盲学校を訪れたのであろうか。またどうして伊沢修二がアメリカから持ち帰ったと伝えられるリードオルガンが京都府立盲学校に所蔵されているのであろうか。アメリカ人であるルーサー・ホワイティング・メーソン、グラハム・ベル、アン・サリバン、ヘレン・ケラーと伊沢修二、これらの人達にはどのようなつながりがあるのだろうか。まずメーソンが京都府立盲学校を訪問した理由から考えてみたい。

メーソンの日本滞在期間（明治一三―一五年）は政府が盲学校を設立するため模索した時期にあたる。メーソン自身も日本滞在中盲

人への音楽教育に関心を示していた。明治政府の盲人教育への関心、盲学校設立の意向と合致させ滞在期間を延ばしたいという希望と彼自身の日本宣教の意志のあらわれと思われる。メーソンは日本に自らを作り上げた音楽教育のシステムを伝えたいという意志ばかりでなく、海外宣教の意志をも持っていた。前述したように彼はアメリカでは音楽に満ちた宣教師 (Tuneful Missionary) と呼ばれていた⁽³⁸⁾。そして盲人への宣教は来日宣教師が望んでいたことでもあった。この件は後述する。メーソンは明治一三年六月二一日付のジョン・S・ドワイト宛書簡で次のように述べている。

もし私の記憶が正しければ、あなたはパーキンズ・インスティチュート・フォー・ザ・ブラインドの理事の一人だと思いません。私は盲人のための印刷楽譜のサンプルと音楽の初歩的な教授法をしるしたサンプルのすべてを手に入れたと考え、この手紙を書いています。ここ日本には一ヵ所ではありませんが、小規模ながら盲人のための教育施設があります。それは政府の援助を受けたものではありません。日本滞在中に、私は盲人のために何かをなしたいという、強い願望を持っています⁽³⁹⁾。

彼は明治一四年一月三日京都府立盲啞院を訪問したが、そのため
の旅行申請書である「メーソン冬期休業中旅行伺」では、次のよう

にその旅行主旨を述べている。

私は貴国における盲人の教育に大変興味を抱いております。そして、私は音楽という分野において盲人のために何がしかのことができると考えております。京都には盲人のための施設があると聞き及んでおります。それゆえ、京都のそのような施設の訪問を希望する次第です⁽⁴⁰⁾。…中略…

また、明治一五年七月からメーソンは自らの教科書改訂と日本の音楽教育のための新資料収集を目的としてヨーロッパを旅行しているが、ハンブルグでは「幼稚園ヨリ訓盲院ニ到ルマデ音楽教授ノ方法等訊」と伊沢修二に書簡(明治一五年一月二〇日付)を書き送っている⁽⁴¹⁾。そして突然の解雇を知ったメーソンは明治一六年一月五日付、文部卿福岡孝弟宛の解雇通知の返信に「貴国教育之為殊ニ盲人教育之為種々計畫仕候事等御座候⁽⁴²⁾」と盲人教育に意欲があったことを示し、伊沢修二宛書簡(明治一六年四月二二日付)でも「私は盲人のために、音楽という分野では特に記譜法、読譜法に関して何がなされているのかに大変注意をはらってまいりました⁽⁴³⁾」と同様のことを伝えている。そこにはメーソンの盲人教育への強い意志を感じる。彼は実際に盲人教育がおこなわれている京都へ行き、その実態を見学したかったのであろう。また京都へ行きたい旨には、彼と同

じ教派であるコングリゲーション派を中心とした宣教団体アメリカン・ボードが関西をその宣教の拠点としていたことも考えられる。メーソンは自らの音楽教育システムを日本に伝えたいという意志とともに海外宣教の意志を持っていた。彼は日本からアメリカの牧師A・C・アダムス氏に「私はかつてしたかったこと、そう、音楽と宣教の両方の仕事をしているのです」と手紙を書き送っている。⁽⁴⁴⁾そして実際京都訪問の前後に大阪在住のアメリカン・ボード女性宣教師ミス・コルビーと会っている。⁽⁴⁵⁾

メーソンは再来日の強い意志を持っていたが、アメリカン・ボードもメーソンの日本招聘の強い希望を持ち、メーソンを宣教師として来日させようとしていた。⁽⁴⁶⁾アメリカン・ボード宣教師ジョージ・オルチンは宣教本部主事クラーク・ヘメーソンの日本招聘の依頼とその理由を述べている。⁽⁴⁷⁾

この書簡で宣教師オルチンがメーソンを高く評価する中で彼は盲人への教育をあげ、メーソンのこの件に関する役割について、次のように述べている。

自分自身の芸術性や技術で自分と家族を養っているプロの音楽家が数人わたしたちの教会にやってきました。そのような人の一人(盲目の女性)が郡山教会をつくった人達の中にいました。そして、わたしにとってはそのような技術を教会の中にと

どめ、そしてそれを純粋な手段に変えるようにすべきだと思います。こうして、彼らを以前のように自分の技術で生活できるようにするので。教会の仕事の中にこの分野を、彼(女)のすべての時間をそれに捧げると思われる一人「メーソン」の特別な管理のもとに行う時がやってきました。⁽⁴⁸⁾

前述の女性宣教師ミス・コルビーは次のようにのべている。

日本人は琴と呼ばれる美しい楽器を持っています。それはこの国でつくられたもので、どこへでも持ち歩くことが容易です。私が考えるに、それはどのような輸入楽器よりも有効なものとされるでしょう。そして、盲目の楽師たちの一団が存在します。彼らは楽器を操るのにすばらしい技術を持っています。私は、ここにはすぐれた知性の持ち主をキリスト教に導くためにひたすら待ち続けていた力が存在していると思っています。⁽⁴⁹⁾

ここでは音楽と盲人と宣教が一体となって考えられている。当時日本には音楽を職業にしていた盲人が多数存在した。オルチン師はその書簡の中で当時「日本のクリスチャンは、クリスチャンになったことにより現在では使うには不適切な日本の音楽をやめたので、わたしたちはそのかわりのものを与えなければなりません⁽⁵⁰⁾」。しか

しこれでは盲人は失業してしまふ。そこで教会で再教育して、それまで同様自活の道を歩ませる。この盲人への教育にメーンソンが最適だとも述べている。ここでは音楽は娯楽や教養ではなく、クリスチャンとしての社会参加（労働、自立）としてとらえられており、宣教事業として重要な分野である。

宣教師オルチンが、帰国したメーンソンをあえて待望するのは、音楽の宣教師としての資質を高く評価していたからに違いない。そしてメーンソンの盲人教育への意欲だけでなく、メーンソンがすでになんらかの方法論を見いだしていたからであろう。その一例として、音楽取調掛のメンバーの一人、盲人山勢松韻⁵¹への教育が挙げられる。メーンソンは前述ドワイト宛書簡で次のように述べている。

「私には盲人の学生が一人おります。彼は琴の最高の奏者であり、先生でもありません。琴とは、日本の十三弦のハーブのことです」。この書簡の盲人の学生とは山勢松韻であろう。メーンソンは盲人のため撫譜^{なまふ}という楽譜を作成した。「米國人メーンソン叙勲之件」では次のように述べられている。

氏ハ又御用掛山勢松韻ノ爲メ特ニ盲人使用ノ一ノ撫譜ヲ創製セリ此ノ撫譜ナル者ハ概ノ盤面ニ黄銅ヲ以テ五線ヲ装置シ又別ニ黄銅ノ薄片ヲ以テ作リタル音楽上各種ノ記號（則チ音度記號、音符、休符、附點、縦線等）數十百個ヲ列置スルモノニシテ松韻

ハ此盤ニ對シ且ツ撫デ且ツ探リ五線ニ各種ノ記號ヲ排置シ以テ能ク自簡記憶ノ日本箏曲ヲ表出スルニ至レリ是レ豈ニ盲人記譜ノ一大良器ニ非ズヤ⁵²

山勢松韻とメーンソンについて『ミュージカル・ヘラルド』（一八八〇年四月）の「チルドレンズ・デパートメント」という子供向け記事には次のような記載がある。

学生としては少し年をとった目の不自由な宮廷楽師が一人、メーンソンさんを訪問して、彼のピアノを大変注意深く調べました。宮廷楽師が私たち西洋の音階と彼ら日本の音階の違いを理解した時に、彼は、「自分たちの音楽が改善されることを長い間願っていました。そしてその時が今まさにやってきたのだと思いたい」と言いました。

その時、宮廷楽師は日本の琴（一三本の弦のあるハーブ。他の国よりも日本ではより普通に用いられる楽器）について語りました。そして、その弦を張り替えることができないかどうかと尋ねました。メーンソンさんは、いろいろなサイズの弦を使うことによつて、日本の古い音階に代わつて、ピアノの音階を琴に与えることができるだろうと考えました。⁵³

伊沢修二は「三弦ニ用フル各調子ノ上ニ掲ル所ノ如キハメーンソン氏ノ早ニ發見セシ所ニシテ」と述べているが、この日本の古い音階に代わってピアノの音階を琴に与える様子を、大森貝塚の発見で有名なエドワード・モースは、その著『日本その日その日』で次のように描いている。

その午後ドクター・ビゲロウと私とは、小石川にある高嶺「秀夫」氏の家へ、晩餐に招かれた。…中略…食事が終るに先立って、美しいコト（日本の堅琴）が二面持ち込まれ、畳の上に置かれた。その一つは高嶺夫人に、他は東京に於て最も有名な弾琴家の一人であるところの、彼女の盲目の先生（山勢松韻）に属するのである。高嶺夫人は、彼女が巧妙な演奏者であることを啓示した。次に彼女は提琴ツァイリンを持って来た。盲目の先生は、弦を支える駒を、楽器のあちらこちらに上下させて、それが提琴と同じ音調になるようにし、彼の琴を西洋音楽の音階に整調した。高嶺夫人が提琴のような違った楽器で、本当の音を出すことが出来るとは信じられぬので、私は、どんな耳をぶち破るような演奏が始まるのかと心ひそかに考えた。いよいよ始ると吃驚した。彼女は大きい力と正確さを以て、「オウルド・ラング・サイン」、「ホーム・スイート・ホーム」、「グロリアス・アポロ」を演奏し、盲人の先生はまるでハーブであるよ

うな、こみ入った伴奏を、琴で弾いた。高嶺夫人は曲譜なしで演奏し、盲目の弾琴家は、いう迄もないが、曲譜などは見ることも出来ぬのである。音楽は勿論簡単なものであるが、私を驚かせたのは、その演奏に於る完全な調和音である。彼女はたった四十七日間しか提琴を習っていない。私は、外国の、全然相違した楽器を弾いた高嶺夫人と、彼の楽器を変えて、彼にとつてはまったく異物であるところの音調と音階とで、かかる複雑な演奏を行った弾琴家と、そのいずれに感心すべきか知らなかった。我々は、非常に遅くまで同家にいた。この経験は実に楽しかった。

山勢松韻自身はメーンソンについて次のように述べている。

音楽學校の先輩は、大概メーンソン先生の薰陶をお受になりましたが、別して私は盲人の不自由なる身ゆゑ一方ならぬ御世話になりました。先生の申さるゝに、貴方は多忙なる身、殊に晩年にて西洋音楽の修行は甚た難事なれば、其初歩と併せて樂理の一斑を學ぶ方然るべしとて、時々一二時間づゝ御教授下されました。それが終わると何時も私の右の手を握りて「ライト、ハンド」、左の手を採りて「レフト、ハンド」、又は、頭を撫でて「ヘッド」などといふ工合に、簡單なる英語を御教へ下され、

實に其懇切なる事は言葉に盡されませんでした、私のような不具人ながら今猶ほ學校に出動して或は古典保存、或は新作書寫等に普通樂譜を取扱ふことの出来るのは、全くメーソン先生と伊澤先生との賜だと存じ感謝に堪へません、先生は日本の音楽が御好で度々私を御招きなされて御聴きになり、又拙宅へも時々御出になりましたが、御邦の風習が御好にて、箸を以て食事となさることも一ツの御自慢でありました、先生がお獨で御來訪の時は、宅に英語を解する者が居りませぬので、大概手まねと推量とで御咄しする事故、折々抱腹に堪へぬ様な間違がありました、御歸國後も屢々御書状を戴き、私よりも寫真など御贈り致しましたが、唯今でも先生の御厚情はしばしも忘れません、この後とても忘れてはならむ御恩と肝に銘じておきます。

(ルビ省略、「メーソン氏逸話」⁵⁸)

ここではメーソンと伊沢修二への感謝の念をあらわしている。

山勢松韻はカタカナ、ローマ字、五線譜による『箏曲集』(文部省音楽取調掛、一八八八年)の選曲をした。これはメーソンによる音楽教育の賜物であろう。オルチン師は *Hymnology in Japan* (一九〇〇年⁵⁹)でこの『箏曲集』の序文(和文と英文)の英文を引用している。この時点でもオルチン師はメーソンが行った盲人への音楽教育がどのような効果をもたらしたのか関心を持っていただけと思われる。

オルチン師は前述の書簡で「もし音楽教育に対する全国的な動きがあれば、それは教会をとおしてやってくるに違いありません」と述べている。メーソンは盲人への音楽教育に関して、オルチン師のように直接教会のこと、また宣教については触れていない。盲人への音楽教育は彼等の社会参加をすすめるためのものだけでなく、キリスト教精神のあらわれ、すなわち弱き者、小さき者への眼差しと言えよう。彼も盲人への音楽教育に関して当然キリスト教の宣教のことが念頭にあったことは想像に難くない。そもそも欧米では音楽とキリスト教は不可分の関係にある。そして何よりメーソンは宣教の意志をもって来日した。盲人への音楽教育こそが彼にとって一番相応しい宣教事業だったのであろう。

特に、当時アメリカの音楽教育の最先端はボストンだった。そのボストンからメーソンは来日してきたのである。ボストンでは、日曜の礼拝に奉仕できる人材を育てるため、月曜から金曜まで基礎的な音楽の技術を習得させるという理由で、公立学校の授業に音楽の科目を導入すべきであるという見解が主流を占めていた。⁶⁰ 教育の場面でも音楽とキリスト教は不可分であり、それを担う中心は教会なのである。オルチン師の言葉「もし音楽教育に対する全国的な動きがあれば、それは教会をとおしてやってくるに違いありません」はこのことが背景になっている。そしてその教会で盲人を再教育して、それまで同様自活の道を歩ませるといっているのである。

ここでの音楽とは単なる技術の一つではない。一九世紀アメリカにおけるキリスト教の宣教活動を特色づけるものの一つに音楽による宣教がある。当時の宣教活動の中に占める音楽の役割は今日我々が考えるものをはるかに超えている。彼らは熱心に西洋音楽の導入をその宣教地ですすめている。このムーブメントの根底にあるものは音楽とは神の摂理のあらわれであるという考え方であった。神の摂理は「自然で完璧な音階」としてこの世にあらわれている。神のみ業のあらわれの一つである音楽を広めること、すなわち盲人に音楽を教育すること自体宣教としての意味をもっている⁽⁶²⁾。同様に学校教育の場面で唱歌の曲に讚美歌の曲をはじめとする西洋音楽を採用することは神の摂理を伝えることになり、宣教そのものと考えることがができる。メーンソンが『小学唱歌集』に讚美歌の曲を採用したのも、メーンソンを日本に派遣したトゥルジェーがその報告を聞いて「日本のキリスト教化はキリスト教音楽によって大いに助けられている⁽⁶³⁾」と述べ、「日本はすでに引き離すことのできない絆でわれわれと結びついている⁽⁶⁴⁾」と海外宣教の結実を宣言したのも、音楽による宣教が念頭にあったからだと考えられる。

さてここで冒頭で名をあげたメーンソン、ベル、サリバン、ヘレン・ケラー、伊沢修二のつながりをまとめてみたい。

前述ジョン・S・ドワイト宛書簡にあらわれるパーキンズ・インスティテュート・フォー・ザ・ブライインドはボストン郊外ウォーター

タウンにある、当時より最先端の教授法で教育を行っていた盲学校である。ヘレン・ケラーの家庭教師として著名なアン・マンズフィールド・サリバンが一八八六年卒業している。資産家のヘレン・ケラーの父が娘の教育を相談するのが電話の発明で有名なグラハム・ベルである。ベル博士の紹介でパーキンズ・インスティテュート・フォー・ザ・ブライインドのアナグノス校長宛にアラバマ州のヘレン・ケラーの父は依頼状を書き、推薦・派遣されたのがアン・マンスフィールド・サリバンだった。ヘレン・ケラーは籍を置いてはいないがパーキンズ・インスティテュート・フォー・ザ・ブライインドに度々通学している。

グラハム・ベルの祖父は吃音矯正法をつくりだし、父のメルビル・ベルは聾啞教育の方法である読唇法・視話文字（法）の発明者だった。グラハム・ベル自身も聾啞教育に熱心で、私財を投じてワシントンで学校経営をしたこともあり、一八九〇年にはアメリカ聾啞教育促進協会を設立するため二万五〇〇〇ドルを寄付した。キリスト教精神のあらわれであろう。一八六三年から一八六四年までスコットランド北岸マレー州エルギンで音楽（ピアノ）とエロキューションの教師として過ごした⁽⁶⁵⁾。またメーンソンがニューヨーク音楽院に在籍の頃、ニューヨーク州音楽院の夏期学校（イースト・グリーンウィッチ・アカデミー）の教員名簿にその名が掲載されている。すなわちメーンソンとベルは一時期同僚だった。音楽家になる

ことを希望していたベルとメーンソンの間で盲人教育・音楽について話し合う機会が持たれた可能性も考えられる。

留学中の伊沢修二は英語習得（特に発音）に苦学していたが、一八七六年フィラデルフィア米国立記念博覧会に出品されていたグラハム・ベルの父が発明した視話文字から「啞者が発音矯正できるなら、普通人の発音矯正ができない道理はあるまい」とボストンに戻るとグラハム・ベルから視話法を学び、英語習得の初志を貫くことができた。また、啞者教育に使われていた視話法との接触は、その後彼の吃音矯正の事業においても成果をあげるにいたった。グラハム・ベル自身が盲人教育にも熱心だったことから、ベルから盲人教育に関しても感化を受けていたに違いない。音楽と盲人教育は結びついており、それを深く認識していた伊沢修二はリードオルガンを京都府立盲学校に贈ったのではなからうか。リードオルガンはピアノに比べ安価で移動に便利である。軽量で折畳みできるリードオルガンはミッシヨナリーオルガンと呼ばれ宣教と結びついており、⁽⁶⁷⁾僅かな例外を除いて宣教師、また宣教師夫人はまず間違いなくオルガンを演奏することができた。ちなみに伊沢修二はボストンでグラハム・ベルと電話連絡をしたことがあり、彼は日本人で最初に電話で話した人として知られている。⁽⁶⁸⁾

グラハム・ベルは、明治三一（一八九八）年来日、伊沢修二と再会、伊沢修二は明治三十一年一月一日、東京盲啞学校におけるべ

ルの演説の通訳をしている。ベルは明治三十一年一月二一日京都府立盲学校を訪問、彼の盲人教育への関心の強さを感じさせる。ここには盲人教育と音楽と宣教がどのような結果をもたらしたか確かめなかったという事情もあつたのではなからうか。後にヘレン・ケラーも京都府立盲学校（昭和十二年五月一〇日）を訪問した。⁽⁶⁹⁾彼女は盲、聾、啞の三重苦だが、キリストの愛に接し多くの著作を残した。世界各国を回って障害者の厚生、福祉のための講演、募金に努め、各地に福音と身体障害者への愛情を訴えた。これも一種の宣教事業と言ってよいのではなからうか。自伝『わが生涯』はグラハム・ベルへ捧げられたものである。⁽⁷⁰⁾

メーンソンと伊沢修二のボストンでの出会い以来の強い絆はここで述べるまでもない。マコナシーの論文には「そして、二人の学生がメーンソンの家に次の土曜日、夕食にやってきて、その後日本の音楽について語り合うことが申し合わされた。これは、定期的な日曜の夕方の集まりの始まりだった。そこで、若い学生（伊沢、目賀田）は、メーンソンに日本の音楽について教え、そしてそのお返しとしてわれわれの西洋音楽システムを教わったのである」と書かれている。⁽⁷¹⁾伊沢修二はメーンソン招聘に尽力し、彼の来日後は音楽取調掛の責任者として彼を擁護し、また数々の書簡の中で常に尊敬と信頼の念をもって接していた。

これらの人たちは、伊沢修二については断言できないが、すべて

キリスト教をバックボーンに持つ人たちである。その伊沢修二であるが、師範教育・音楽教育・体操教育・実業教育・国語と中国語研究・聾啞教育・吃音矯正事業・台湾教育・教科書編纂学制研究会等多方面で活躍した明治の先覚者である。彼は、冒頭ご紹介した吉田論文に述べられている宣教師が行った事業である教育、出版、医療、看護、福祉、音楽、体育、芸術とバラレるな事業を成し遂げた人物である。洗礼を受けてはいないが、彼の行動の動機には宣教師がめざしたことから受けた強い影響があるのではないだろうか。

明治期の盲人教育と音楽を調べていくと、キリスト教をバックボーンに持つ人たちの、すなわち宣教、宣教師のネットワークによってなされた宣教事業であるという側面がはっきり浮かび上がってくる。

これまでこれらの事実に関連性をもって語られることは少なかった。メーソンの作成した無譜を伊沢修二が彼個人によるものとしようとしたためメーソンの盲人教育の業績が伝わりにくくなったこともその一因であろう⁽⁷⁾。しかし、最大の原因は日本の盲人教育史、音楽教育史を宣教、宣教師の観点から論じることが希有であるためであらう。盲人教育と音楽の関係は大きな宣教事業の一角としてとらえるべき課題であったと考えられるのである。

注

- (1) 吉田亮「序章 総合化するアメリカン・ボードの伝道事業」『来日アメリカ宣教師』(現代史料出版、一九九九年三月)、一頁。
- (2) イザヤ書二九章一八節他一〇箇所。『新共同訳聖書 コンコルダンス』(新教出版社 平成九〔一九九七〕年五月)、三四五頁。
- (3) 石松量蔵著『盲人とキリスト教の歩み』(日本盲人基督教伝道協議会 昭和三四〔一九五九〕年七月)、七一―七八頁。
- (4) Music in Japan, *The Boston Herald Supplement*, Nov. 8, 1879. 拙訳「日本における音楽」『讚美歌・聖歌と日本の近代』(音楽之友社、平成一一〔一九九九〕年一月)、一三三頁。
- (5) Music in Japan, *Dwight Journal of Music*, August 14, 1880, p. 135.
- (6) 東京盲学校編『東京盲学校六十年史』(東京盲学校 昭和一〇〔一九三五〕年一月)、一七頁。
- (7) 前掲書、一七頁。
- (8) 下田知江著「ヘンリー・フォールズと盲教育」築地居留地研究会編『築地居留地 近代文化の原点』1(築地居留地研究会 平成一二〔二〇〇〇〕年一〇月)、六四頁、中島耕二・辻直人・大西晴樹著『長老・改革教会来日宣教師事典』(新教出版社 平成一五〔二〇〇三〕年三月)、二九九頁。
- (9) 下田知江著「ヘンリー・フォールズと盲教育」築地居留地研究会編『築地居留地 近代文化の原点』1(築地居留地研究会 平成一二〔二〇〇〇〕年一〇月)、六六頁、中島耕二・辻直人・大西晴樹著『長老・改革教会来日宣教師事典』(新教出版社 平成一

五〔二〇〇三〕年三月)、二九九頁。

(10) Parker, F. Calvin, *Jonathan Goble of Japan* (Lanham: University Press of America, 1990), P. 210, 218, 299.

(11) 川島二郎著『ジョンナサン・ゴープル訳「摩太福音書」の研究』(明石書店 平成五〔一九九三〕年九月)、二四、三〇頁。

(12) 下田知江著「ヘンリー・フォールズと盲教育」築地居留地研究会編『築地居留地 近代文化の原点』1(築地居留地研究会 平成二二〔二〇〇〇〕年一〇月)、六四頁。

(13) 前掲書、六四頁。

(14) 谷合 侑著『盲人の歴史』(明石書店 平成八〔一九九六〕年九月)、一〇九頁。

(15) 前掲書、一一〇頁。ミッションスクールに準ずる学校(神戸訓盲院、日向訓盲院、彦根訓盲院、東北盲人学校)、信者によって創設された学校(旭川盲学校、帯広旭盲学校、稚内盲学校、弘前盲学校、鶴岡盲学校、郡山盲ろう学校、松本盲学校、熊本盲学校)。

(16) 鈴木力二編著『図説盲教育史事典』(日本図書センター 昭和六〇〔一九八五〕年六月)、文部省編『盲聾教育八十年史』(日本図書センター 昭和五六〔一九八一〕年九月)、『日本キリスト教歴史大事典』(教文館 昭和六三〔一九八八〕年二月)、吉田久一著『日本社会事業の歴史 全訂版』(勁草書房 平成六〔一九九四〕年二月)、石松量蔵著『盲人とキリスト教の歩み』(日本盲人基督教伝道協議会 昭和三四〔一九五九〕年七月)、六一―七七頁より。設立だけでなく維持に關してもキリスト教関係者が評価されている。後述の京都府立盲啞院の第二代の院長鳥居嘉三郎はクリスチ

ヤンで、「困難な状況におかれた盲啞院を支えた人々の中に良心的なプロテスタントの一群があったことを記しておかねばならない」

盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会編『京都府盲聾教育百年史』(京都 盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会 昭和五三〔一九七八〕年三月)、八二頁。

(17) 中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房 平成五〔一九九三〕年二月)、四六五頁。

(18) 『教育雑誌』第三号(明治九年)、複製版『明治前期文部省刊行誌集成』、二二―二三頁。中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房 平成五〔一九九三〕年二月)、四六五頁掲載。

(19) 東京盲学校編『東京盲学校六十年史』(東京盲学校 昭和一〇〔一九三五〕年一月)、一五一―一六頁。

(20) 前掲書、二九、四五頁。

(21) 中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房 平成五〔一九九三〕年二月)、四六五、四九二頁。

(22) 奥中康人氏のご教示による。以下注(23)―(26)も同様。奥中康人著『唱歌と規律 近代日本の統治技術としての音楽』(大阪大学大学院文学研究科博士「文学」学位請求論文 平成一五〔二〇〇三〕、久米邦武編、田中 彰校注『米欧回覧実記(一)』(岩波書店 昭和五四〔一九七九〕年二月)、九八―九九頁、久米邦武編、田中 彰校注『米欧回覧実記(三)』(岩波書店 昭和五二〔一九七七〕年九月)、一五三―一五四頁。

(23) 前掲書、一五四頁。

(24) 前掲書、一五五頁。

- (25) 前掲書、一五六頁。
- (26) 前掲書、一五六頁。
- (27) 盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会編『京都府盲聾教育百年史』(京都 盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会 昭和五三「一九七八」年三月)、八二頁。
- (28) 石松量蔵著『盲人とキリスト教の歩み』(日本盲人基督教伝道協議会 昭和三四「一九五九」年七月)、六二―六六頁。
- (29) 今駒泰成著『ドレーパー』『日本キリスト教歴史大事典』(教文館 昭和六三「一九八八」年二月)、九六七―九六八頁。
- (30) 石松量蔵著『盲人とキリスト教の歩み』(日本盲人基督教伝道協議会 昭和三四「一九五九」年七月)、一五頁、「点字聖書」『日本キリスト教歴史大事典』(教文館 昭和六三「一九八八」年二月)、九〇六頁。
- (31) 横浜訓盲院編『光を求めて九十年』(横浜訓盲院 昭和五四「一九七九」年一〇月)、三一五、三二―三三、六七―七七、二〇八―二二〇、二三二―二三九頁。今駒泰成著『横浜訓盲院』『日本キリスト教歴史大事典』(教文館 昭和六三「一九八八」年二月)、一四六七頁。
- (32) 石松量蔵著『盲人とキリスト教の歩み』(日本盲人基督教伝道協議会 昭和三四「一九五九」年七月)、六三―六四頁。
- (33) 伊佐治清市編『岐阜盲学校六十年史』(岐阜県立盲学校 昭和二九「一九五四」年五月)、二二、二三頁。
- (34) 前掲書、二七頁。
- (35) A・ハミッシ・アイオン著「十字架の使節 カナダ人宣教師が日本に与えた影響」ジョン・シュルツ、三輪公忠編『カナダと日本』(彩流社 平成三「一九九二」年九月)、九四頁。
- (36) 安田寛氏にご教示いただいた。
- (37) 京都府立盲学校教諭小泉良一氏のご教示による。
- (38) Music in Japan, *Dwight Journal of Music*, August 14, 1880, p. 135.
- (39) メーソンのJ・S・ドワイト宛書簡は「ドワイト ジャーナロブ ミュージック」のなかで、「Mr. Mason in Japan. Tokyo, July, 21, 1880」として掲載されている。
- (40) Mr. Mason in Japan, Tokyo, July 21, 1880, in *Dwight Journal of Music*, Sept. 11, 1880, p. 135.
- (41) 『回議書類 明治十三年二月―十五年六月』下巻一五九丁。原文は英語。
- (42) 「メーソンから伊沢修二あて書簡 明治十五年十一月二十日付」『音監往復書類』明治十六年下、東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第一巻(音楽之友社 昭和六二「一九八七」年一〇月)、二三八―二三九頁。
- (43) 「解雇通知に対するメーソンからの返信 明治十六年一月十五日付」『音監開申書類』明治十六年下、東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第一巻(音楽之友社 昭和六二「一九八七」年一〇月)、二三九頁。
- (44) この書簡は上沼八郎著「伊沢修二と Luther Whiting Mason」『東京女子体育大学紀要』第五号(昭和四五「一九七〇」年)に紹介されている。

- (44) An interesting history, in *Congregationalist*, 1885. 9. 10.
- (45) Music and missions Osaka Japan, in *Musical Herald*, June, 1884.
- (46) 安田寛著「L・W・メーンソンの再来日計画とアメリカン・ボールド日本ミッション」『キリスト教社会問題研究』第四四卷(平成一〇「一九九八」年二月)
- (47) 明治一七(一八八四)年一月四日付書簡。
- (48) 前掲書簡。
- (49) Music and missions Osaka Japan, in *Musical Herald*, June, 1884.
- (50) 明治一七(一八八四)年一月四日付書簡。
- (51) 山勢松韻(一八四五—一九〇八)は東京市下谷区中徒町に生まれ。嘉永四(一八五二)年より箏曲を修業、山田流箏曲界の実力者。明治元(一八六八)年先師山勢檢校死去に伴い、同家を相続し松韻と改名する。明治一三年より音楽取調掛に勤務。明治二四年、東京音楽学校教授になった。
- (52) 『米國人メーンソン叙勲之件』(外務省外交資料館所蔵)、「元文部省雇音楽教師米國人エル、ダヴリュー、メンソン(ママ)氏功績調査書」〈第一、公務ニ関スル功績、第七、教授の準備(乙)〉。この『米國人メーンソン叙勲之件』は中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房 平成五「一九九三」年二月)の付録(七五三—七六七頁)に全文が掲載されている。「功績調査書」『同聲會雑誌』第五号(明治三〇「一九九七」年三月)にはこの部分は転載されていない。
- (53) Children's Department, in *Musical Herald*, April, 1880, 91p.
- (54) 伊沢修二『音楽取調成績申報書』「内外の音律ノ異同研究の事」(明治一七「一八八四」年二月序)、六二頁。
- (55) 高嶺秀夫(一八五七—一九一〇)は福島県会津若松の生まれ。明治三(一八七〇)年に上京し、慶應義塾に学んだ。明治八(一八七五)年、伊沢修二、神津専三郎とともにアメリカに留学、オスウェゴ師範学校で学ぶ。三人とも身分は文部省八等出仕、師範科取調のためのアメリカ派遣であったが、いずれも音楽取調掛(後東京音楽学校)に関わることになる。高嶺秀夫は帰国後、東京師範、高等師範、女子高等師範の校長を歴任。師範教育改革に尽力し、日本にペスタロッチ主義開発教授法を紹介した。また、東京美術学校、帝国博物館理事にもなり、東京高等師範学校校長時代に第八代東京音楽学校の校長(明治三七—四一年)を兼任している。
- (56) 高嶺秀夫夫人中村専はメーンソンの直弟子で、第一回(明治一三年一〇月)の音楽取調掛伝習生として洋楽を学んだ。ピアノ、ヴァイオリン、箏に秀で英語にも堪能だったためメーンソンに気に入られ、音楽取調掛の助手を務めた。メーンソンは通訳官の岡倉寛三(天心)をさせておき、彼女の通訳で授業をしたと伝えられている。高嶺秀夫、中村専の略歴は次の五点による。中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房 平成五「一九九三」年二月)、小島一男著『会津人物事典(文人編)』(歴史春秋出版 平成二「一九九〇」年一二月)、『日本史広辞典』(山川出版社 平成九「一九九七」年一〇月)、東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学

- 百年史 東京音楽学校篇』第一卷（音楽之友社 昭和六二「一九八七」年一〇月）、高嶺秀夫先生記念事業会編『高嶺秀夫先生伝』（培風館 大正二〇「一九二二」年一二月）。
- (57) モース著『日本その日その日 3』（平凡社 昭和四六「一九七二」年一月）、四三—四五頁。
- (58) 山勢松韻君談話『メーソン氏逸話』『同聲會雜誌』第六号（明治三〇「一八九七」年八月）。
- (59) Hymnology in Japan, in *Proceedings of the General conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24—31, 1900* (Tokyo: Methodist Publishing House, 1901) に収録された。拙訳「日本における讚美歌』『讚美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社 平成一一「一九九九」年一二月）。
- (60) 明治一七（一八八四）年一月一四日付書簡。
- (61) Eben Tourjée, *A plea for vocal music in public schools* (Boston: Mudge, 1871), pp. 9-10. "The teaching of music in the schools prepares for participation in the church service"
- (62) 拙著「19世紀アメリカの宣教と音楽』『人文科学研究（キリスト教と文化）—国際基督教大学学報 IV—B』第三〇号（国際基督教大学キリスト教と文化研究所 平成一一「一九九九」年三月）参照。
- (63) Walker, Edward Dwight, *The New England Conservatory of Music, Cosmopolitan*, September, 1889, pp. 490-491.
- (64) *Manual of the New England Conservatory of Music, 1886-1887*, p. 34.
- (65) ロバート・V・ブルース著、唐津一監訳『孤独の克服 グラハム・ベルの生涯』（N T T出版 平成三「一九九二」年五月）、四二頁。
- (66) 赤井励氏のご教示による。彼によれば「ミッションナリーオルガンという言葉は、Robert F. Gellermann氏が著書 *The American Reed Organ*, 4th ed. (West Press, 1982.) で使用。カタログ上での標準的な言葉は *Folding Organ* または *Port Organ*。アクラマタイズド（全天候型）オルガンという言い方だが、実際の使用局面は、海外派遣宣教師の使用、従軍牧師、墓地での埋葬サービスなど、ほとんどがキリスト教で使用された。そして教会に据え置きで使用されるリードオルガンは「チャペルオルガン」という言い方が一般的のようである」。
- (67) 注(65)、二二八—二九頁。
- (68) ここまでの典拠は次の八点による。ジョゼフ・P・ラッシュ著、中村妙子訳『愛と光への旅 ヘレン・ケラーとアン・サリヴァン』（新潮社 昭和五七「一九八二」年一月）、ロバート・J・スミスダス著、鈴木陽子訳『見えない、聴こえない、私。—ヘレン・ケラーを超えて—』（星の環会 昭和六〇「一九八五」年九月）、サリヴァン著、槇恭子訳『ヘレン・ケラーはどう教育されたか—サリヴァン先生の記録—』（明治図書 昭和四八「一九七三」年四月）、山主敏子著『ヘレン・ケラー（世界の伝記 四二）』（ぎょうせい 昭和五五「一九八〇」年九月）、上沼八郎著『伊沢修二』（吉川弘文館 昭和三七「一九六二」年一〇月）、七三—七五頁、信濃教育会編『伊沢修二選集』（信濃教育会 昭和三三「一九五八」年七

月) 一〇四二頁、Tourjée, Leo Eben, *For God and Music: the life story of Eben Tourjée*, (unpublished typescript, Los Angeles : Leo Eben Tourjée, 1960), MacPherson, Bruce & Klein, James, *Measure by Measure: a history of New England Conservatory from 1867* (Boston : The Trustees of New England Conservatory of Music, 1995), p. 30.

- (69) ロバート・V・ブルース著、唐津一監訳『孤独の克服 グラハムベルの生涯』(NTT出版 平成三「一九九二」年五月)、四〇六頁に「アレクザンダー・グラハム・ベル略一私はこの生涯の物語を、捧げる」と書かれているが、日本語訳、ヘレン・ケラー著、岩橋武夫訳『わたしの生涯』(角川書店 昭和四一「一九六六」年六月)には掲載されていない。

(70) McConaty, Osbourne, *Mason song in Japan, in Music educators Journal First Fall Issue, 1937, 9.*

- (71) 伊沢修二のメーンソンの書簡は、信濃教育会編『伊沢修二選集』(信濃教育会 昭和三三「一九五八」年七月)、東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第一巻(音楽之友社 昭和六二「一九八七」年一〇月)、『音楽取調掛時代(明治一三—明治一五)所蔵目録(三)各種資料編』第一巻(東京芸術大学図書館 昭和四六「一九七二」年五月)に収録されている。

(72) 撫譜にあたるものは、東京芸術大学、京都府立盲学校、官立訓盲啞院の流れをくむ筑波大学附属盲学校には残っていない。明治一八(一八八五)年、盲人教授用楽譜表(一個)と音符(五〇〇

個)がロンドンで開催された発明品博覧会に出品されているが、伊沢修二発明になっている。これも現存しない。メーンソンの再来日が不可能であることが決定的になったためメーンソンのものを伊沢修二の名前で出品したのではあるまいか。以後伊沢修二は自らの発明に関してまったく言及していない。『米國人メーンソン叙勲之件』(明治二八年二月一日)は中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(刀水書房 平成五「一九九三」年二月)の付録(七五三—七六七頁)に全文が掲載され、撫譜等盲人教育に関するメーンソンの功績が述べられているが、『功績調査書』『同聲會雜誌』第五号(明治三〇「一九九七」年三月)にはこの一文が転載されていない。『同聲會雜誌』は容易に見ることのできる資料だが、『米國人メーンソン叙勲之件』は公文書のため中村理平氏が『洋楽導入者の軌跡』で取り上げるまで知られることは稀だった。意図的に削除された可能性も考えられる。